

## なぜ彼らは特定の地域に関わり続けるのか

○寺田美里（岩手大学）・五味壮平（岩手大学）

Keyword: 関係人口, インタビュー, 地域活性化

### 【はじめに】

日本全体が人口減少社会をむかえ地域の維持が困難となっている。一方で、社会ではふるさとへの憧れや地方への関心が高まる潮流が見られている。こうした状況の中、居住しないまま特定の地域に多様に関わる人たちのことを指す「関係人口」という概念が生まれている。関係人口は、定住人口でも交流人口でもない人々であり、地域を思い、継続的に関わる人を指す概念である。本研究では、関係人口である彼ら一人一人の地域との関係に目を向け、こうした人々は地域との継続的な関係をどのように築いていったのか、彼らがなぜ特定の地域に関わり続けるのかを明らかにするため、岩手県陸前高田市の関係人口とみなされる人々を対象に聞き取り調査を行った。

### 【関係人口について】

関係人口という概念は2016年から2017年にかけて広まっていった。作野(2019)によると、その源流となったのは2016年から2017年の間に出版された3つの出版物である(高橋(2016)、指出(2016)、田中(2017))。これらの3つの出版物が提示する関係人口についてどのように言及しているかについて以下に記述する。まず、高橋は関係人口を交流人口と定住人口の間に眠る人々であると述べている(高橋, 2016)。地域との関わり方には定住するかしないかだけではなく多様な関わり方があり、地方に関心のある人々にとって関係人口は現実的な選択肢だとしている。指出も同様に、定住する以外にも、地域への多様な関わりがあることについて言及し、関係人口を「地域に関わってくれる人口」と定義している(指出, 2016)。さらに、関係人口を「自分のお気に入りの地域に週末ごとに通ってくれたり、頻繁に通わなくても何らかの形でその地域を応援してくれるような人たち」(指出2016, p219)と表現している。田中は関係人口を「地域に多様に関わる仲間」とし、地域に住んでいなくても関わる仲間が増えることで地域は元気になると述

べている(田中, 2017)。また、関係人口について「例えば、定期的に来てくれたり、特産品を買ってくれる人。離れていても、地域のファンであり、ともに盛り上げてくれる。」(田中 2016, p8)と言及している。また、地域に居住するのは1つの地域に限られる一方、関係人口では複数の地域と関わりを持つことができるとし、新たな可能性について指摘している。田中(2021)では、新たに「関係人口を特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」(p77)であると定義づけている。以上のように、関係人口は、定住人口でも交流人口でもない人々であり、地域を思い、継続的に関わる人を指す概念である。

関係人口が誕生し注目されてきた背景として、田中(2021)は、地方では地域再生の主体の維持は量と質の両面において困難な状態であり、地域外の主体に期待がかかる中、都市部の若者を中心とした人々の地方への関心は高まっているものの、これまでの地方の移住・定住、交流・観光の取り組みは、地域に関心を持つ人々のニーズと合っていなかったとした。そのような中、交流以上移住未満の関係を望む人々を踏まえた「関係人口」の概念が誕生し、新たな地域との関わり方が注目されるようになっていったことが背景として挙げられる(田中, 2021)。関係人口について考える上では、関係人口を量的に捉えるのではなく、地域に多様に関わる一人一人に目を向けることが重要である。また、関係人口のあり方は多様であり、関係人口のゴールは移住ではなく、移住はあくまでも1つの結果という位置づけであることを理解する必要がある。

### 【研究方法】

岩手県陸前高田市の関係人口とみなされる人々12名を対象に、半構造化インタビューを行った。2021年6月14日から2021年7月19日の期間に、zoomやFacebookの通話によるオンラインインタビュー、及び対面でのインタビューを行った。特定の地域に関わ



地域への『関心』では、地域へ行くことで知り合いが増えることや、復興の様子や新たにオープンしたお店を見ること、イベントの参加への関心が含まれている。五味（2016）では、記憶や知識の蓄積など訪問者側の変化を自身内部の変化、環境そのものの客観的な変化を環境の変化としている。自身の内的な変化と、訪問するたびに感じる環境の変化、陸前高田市に関わる人やイベントへの関心など、地域に存在するもの、地域に行くことで感じられるものごとへの関心という共通点があることから、『関心』というカテゴリに整理した。「田舎に行く非日常感」には、田舎の環境へ行くという非日常への『関心』と、自身が居住する環境と切り離されているという『居心地』の良さの両側面がある。また、自然環境の魅力について、陸前高田市の気仙茶や星空、からっとした天気などが挙げられ、それらへの『関心』とともに、それらから陸前高田市ならではの空気を感じられるという『居心地』の両側面があった。そのため、これらの2項目は『関心』というカテゴリの中で『居心地』に近い位置づけをしている。

地域における『居心地』では、知り合いに会えること、地域の人々の温かさや地域の環境が含まれている。居住地域では仕事上の利害関係がある人間関係の中で生活をしている一方、陸前高田市では利害関係のない人との付き合いができるという居心地の良さが要因に挙げられていた。また、地域の人々の温かさに触れられること、自身の活動などに対し協力的であることや、自身のふるさとに似た自然環境なども『居心地』というカテゴリに分類した。

『役割』では、仕事や活動への責任、地域に貢献したいという想いが含まれている。いずれの項目も、自身の役割を意識しているものであるため『役割』というカテゴリに分類した。

自身の『生活』について、対象者の多くは関わるための時間を確保できることや、家庭環境などの「自身の生活環境」の良さを実感していた。

また、多くの対象者に共通する関わり方の継続要因は「知り合いに会える」ということであった。また、「知り合い」はあの人に会いたいという特定の人物である場合だけでなく、不特定多数のうちの誰かである場合

も多い。

### 【考察】

本研究では、〈地域に関わり続けられている要因〉〈地域での人とのつながりの獲得〉〈関わる中での葛藤とそれによって生じた変化〉〈地域に住まずに関わりを続ける要因〉について取り上げ、その観点に関してインタビューで得られた発言をKJ法やコード分析を用いて考察を行った。

対象者が〈関わりを続けられている要因〉について、まずは「自身の生活環境」が地域に継続的に関わるための前提条件として存在していると考えられる。そして、彼らの多くは何らかのきっかけがあって地域に関わり始める中で、人との交流が生まれ知り合いができることで、地域に継続的に関わる関係人口になっていく。さらに、その継続的な関わりを支えるものとして、地域における『関心』『居心地の良さ』『役割』が重要であると考えられる。

以上より、地域への継続的な関わりには、①地域に関わることでまちや自身に変化があること、②居心地の良い空間があること、③役割を果たせる余地があることが重要であると考えられる。さらに「知り合いに会える」ということが継続的に関わる大きな要因となっていることから、人とのつながりが生まれる接点があることも重要である。では、関係人口である彼らには地域でどのように知り合いができ、人とのつながりが広がっていったのだろうか。

対象者からの聞き取り結果に基づいて、陸前高田市に関わる中での〈人とのつながりの獲得〉についての発言を分析した結果、『仕事や活動での協働』『つながりができる場』において人とのつながりができていることが分かった。対象者の多くは陸前高田市での仕事や活動を通して人とのつながりを獲得している。その交流によって新たな活動が生まれ、その活動でさらにつながりは広がっている。仕事や活動を通して人と関わり、何度も顔を合わせ親しくなったり、もっと話したいと感じたり、意気投合したり、尊敬の気持ちを持つたりすることで関係性は深まり継続している。『つながりができる場』については、陸前高田市に関する市内外でのイベント、コミュニティが広がる仮設店舗

などの場、また知り合いや Facebook を通じて獲得されていることが明らかになった。

そして、人々が〈地域に住まわずに関わりを続けている要因〉は『生活の基盤が別にある』『働くビジョンが見えない』『ちょうどよい距離感で関わりたい』ことによる。〈関わる中での葛藤〉については『自身の活動に関する葛藤』が多く挙げられ、対処できない葛藤では関わりのモチベーションに影響する可能性があることが示唆されたものの、多くは地域の人に受け入れられているという感覚を得るなど地域住民の肯定的な態度などによって乗り越えていた。小林ら(2022)は、住民側が関係人口に対して能力を発揮できる場を提供したり誘ったりし、その場で好意的な反応を示すことや、地域での活動についての継続的な情報提供や活動意義を提示することが、外部人材の主体性やポジティブな気持ちを育み継続的な活動を支えることを明らかにしており、本研究でも、地域住民が関係人口を個として認識し、関係人口が、自分が受け入れられている、活動が認められていると感じるような肯定的態度が継続的な関わりに重要であることが示唆された。

本研究で示唆されたことのまとめとして、知り合いに会えることを含め、地域の人に受け入れられているという感覚が、継続的な関わりや関わる中で葛藤を乗り越えるために重要であることが明らかになった。また、地域の人に受け入れられていること、自身の役割があること以外に、地域への関心が継続要因として挙げられた。地域へ関わる中で、自身の内的な変化や目に見える外的な変化を感じられること、地域の自然環境の魅力など、地域ならではの事物が継続要因として重要であると考えられる。これまで、関係人口創出にあたって地域への関わり方を案内する機能を持つ「関係案内所」の重要性が指摘されてきた。本事例では、人とのつながりにおいて、イベントや祭りなど人が集まる時間的に限定された場、仮設店舗など常に受け入れてくれて居場所となり得る場の双方が重要であることが明らかになった。例えば、首都圏でのイベントが首都圏に住む人々の陸前高田市とのつながりの維持にも大きな役割を果たすなど、「関係案内所」は関わりの入り口だけでなく、関わりを継続していく

ためにも重要だと考える。

#### 【引用・参考文献】

小田切徳美, 2018, 「関係人口という未来: 背景・意義・政策 (特集「関係人口」と自治体: 人口政策・第三の道)」『ガバナンス』202, 14-17.

小林悠歩・中塚雅也, 2022, 「農山村における外部人材の継続的な協働を促す働きかけ: 福井県越前町熊谷区の事例から」『農林問題研究』58 (2), 67-74.

五味壮平, 2016, 「なぜ陸前高田に通いたくなくなってしまったのか?」『人工知能学会全国大会論文集』30, 1-2.

作野広和, 「関係人口という未来: 背景・意義・政策 (特集「関係人口」と自治体: 人口政策・第三の道)」『ガバナンス』202, 18-20.

作野広和, 2019, 「人口減少社会における関係人口の意義と可能性」『経済地理学年報』65, 10-28.

指出一正, 2016, 『ぼくらは地方で幸せを見つける: ソトコト流ローカル再生論』ポプラ舎.

高橋博之, 2016, 『都市と地方をかきまぜる: 「食べる通信」の奇跡』光文社.

田中輝美, 2017, 『関係人口をつくる: 定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎.

田中輝美, 2021, 『関係人口の社会学』大阪大学出版会.

総務省, 2019, 「『関係人口』とは?」, 関係人口ポータルサイト,  
<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html> (2021/8/4 最終閲覧).

(2021/8/4 最終閲覧).

陸前高田市 HP, 2023, 「令和 5 年度人口・世帯数 (住民基本台帳)」,  
[https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/shisei\\_shinokeikaku/shinogaiyo/jinkousetaisuu/7127.html](https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/shisei_shinokeikaku/shinogaiyo/jinkousetaisuu/7127.html) (2023/05/19 最終閲覧).

陸前高田市 HP, 2021, 「陸前高田市のプロフィール」,  
[https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/shisei\\_shinokeikaku/shinogaiyo/shinoprofile/3177.html](https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/shisei_shinokeikaku/shinogaiyo/shinoprofile/3177.html) (2021/8/4 最終閲覧).